台湾国語における“有+VP”の使用状況

鄭　　文　琪

1. はじめに

1.1　台湾国語とは

台湾では小学校1年生から“国語”という科目で言葉の勉強をはじめる。授業では漢字を表音する注音字母から繁体字などを覚えて読み書きの練習をする。いわゆる国の言語教育である。現在の台湾の“国語”というのは1945年の“光復”[1]と同時に、中国国民党によって台湾に持ち込まれた当時の中国語である。それまでの“国語”であった日本語に代わって台湾の公式言語になった。それ以来、数十年にわたって“台灣國語之運動”が施行され、学校教育や公的な場では徹底的に中国語を使用することを要求されていた[2]。一方、台湾では元来閩南語、客家語などの方言が存在し、日常生活で使われてきた。そのうち、閩南語を使う中国福建を中心とした移民が多かったため、閩南語は“台灣話”（以下台湾語）という地位を得た[3]。こうした背景の下、1949年以後入ってきた中国語と台湾語が接触し、徐々に台湾特有の中国語が生まれた。80年代から言語学者の間では「台湾国語」[4]として注目されるようになった[5]。特に“有＋VP”はその構文上の特徴の一つである。

1.2　“有＋VP”

“有”は古くからある言葉で、最古の例は『詩経』に見られる。近代では馬建忠1983（177頁）が『馬氏文通』で“不记行而惟言不动之境”と述べ、“有”を動詞と見なした。呂叔湘1942が“有”は一般の動詞と違う特性を持っていると指摘して以来、“有”の構文（以下“有”構文）に関する研究は盛んにな

されてきた。普通話では“有”は動詞で名詞を目的語としてとり、存在や所有の意味を表す。現在台湾国語では“有”の直後に動詞か動詞フレーズがつづく用例がたくさん観察されている。本稿では、このような構文（以下“有＋ VP”）を研究対象に考察を進めたい。研究方法としては、新聞、雑誌、テレビ、インターネットから大量に用例を集め、“有＋ VP”の使用状況を把握する。さらに普通話と比較対照しながら、“有＋ VP”の意味的特徴を探るのが本稿の目的である。

2. 先行研究

2.1　中国語の先行研究

80 年代中頃以降、普通話では“有没有＋ VP”が文学作品に現れ始めたと邢福义 1990 は指摘している。また、“有没有＋ VP”が広く受け入れられた理由として、“是否＋ VP”より構文上の制限が少なく口語で使いやすいこと、政策開放による南方方言の影響を受けているという二点を挙げている。董秀芳 2004 は“有没有”を一つの助動詞と見なすべきであると主張し、将来逆形成（back formation）により“有”という助動詞が生じる可能性があると述べた。さらに王森等 2006 が、テレビなどのメディアから言語資料を集め、調査した結果、“有没有＋ VP”、“有＋ VP 吗”、“有＋ VP”の使い方は前より高い頻度で使われていることが分かった。“有＋ VP”は台湾国語だけではなく、普通話でも受容度が高まりつつあると言えるであろう。

2.2　台湾語と台湾国語の先行研究

台湾では“有 +VP”の研究は台湾語と台湾国語に分けることができる。まず台湾語について曹逢甫・鄭縈 1995 は“有”の用法を存在、領有、出現、存在貌[6]、強調の五つに分け、存在、領有、出現の用法は台湾国語と共通するが、“有 +VP”の使い方は台湾語のみであると述べた。鄭良偉 1997 によると、“有＋ VP”は、話者が生まれ育った言語環境によって受容度が異なり、“閩南語”（台湾語）が母語である人の間では、“有＋ VP”に対する受容度が高い。蔡

2003 は台湾語、客家語、福州語などの方言を通して研究分析した結果、“有”は所有＞存有＞存在の変化を経て、完了と断定の意味を持つようになったと主張した。なお、普通話では、“有”も本来完了と断定を表す働きがあったが、現在、完了を表すアスペクトマーカー“了”と、焦点を表すマーカー“是”によって取って代わられたと述べた。

3. “VP”について

ここでは“VP”を動詞あるいは動詞フレーズと定義する。動詞の表す事態について、大きく静的な事態と動的な事態に分けることができる。時間軸において、動的な事態は開始点や終結点などといった時間的な区切りを少なくとも 1 つ持つ。それに対し、静的な事態は時間的な区切りが内在せず、少なくとも一定期間持続するものである。なお、静的事態は、時間性を持つ［状態］と、時間性を持たない［属性］を含む[7]。

3. 1 “VP”が静的な事態

静的な事態を表す動詞には、属性動詞と心理動詞がある。収集したデータの中に“是”、“姓”などの属性動詞が“有”と共起する用例は見つからなかった。又、“有＋是”、“有＋姓”という組み合わせで、インターネットで検索をかけても用例が出なかった。このことから“有 +VP”の“VP”について、なんらかの制限があると考えられる。“有 +VP”が“有 +NP”から由来したことから、動詞の意味する動作・行為と、名詞の意味する事物について考えてみたい。事物と動作・行為について陳平 1988 は次のように述べている。

“事物的显著特点表现在空间方面，因为它们一般都占有空间，表现体积上的特征。而行为动作的特点则表现在时间方面，可根据不同时间阶段分辨动作呈现不同状态。”（ものの特徴は空間に現れる。なぜなら、ものは一般的に空間を占めていて、体積上の特徴を表す。それに対し、動作・行為の特徴は時間に現れる。時間の展開によって、動作が表す状態の違いを見分けることができ

る。）　（訳は筆者）

つまり、“有 +NP”は事物の存在を表すのに対し、“有 +VP”は現実の時間に、ある動作・事態が起こっていることを表す。“是”、“姓”などの属性動詞は、静的（state）な事態を表し、動的な変化がない。時間軸において開始点や終結点などが見られない。さらに一定した均質な状態を表す性質を持つため、一つの区切りとして切り取ることができない。要するに、時間軸において、属性動詞の表す事態を捉えようがないため、“有＋ VP”の持つ「現実の時間においてある事態の存在を表す」という意味と矛盾が生じる。ゆえに、“有”は属性動詞と共起しにくいと考えられる。

一方、“有”が心理動詞と共起する用例はたくさん見られる。

(1)　我有想買小筆電，大家能推薦我嗎？

（モバイルパソコンを買おうと思っているけど、誰かいいのを薦めてくれますか？）

(2)　他有喜歡我嗎？還是我自作多情？

（彼はほんとうに私のことが好きなの？それともただの私のうぬぼれ？）

(1)(2) は普通話と同じように“有”を取っても成立するが、“有”を使うことにより、命題に対する確認の意味が読み取れる。(1) は聞き手に対し、何か意見を求める前提文として、話し手はそういう考えを持っていることを、“有”によって強める効果がある。(2) は“他”という男性が“我”という自分に対して、はたして気があるかどうかを確かめたいため、“有”を“喜歡”の前において、確認の意味を表す。台湾国語では、“有”が心理動詞と共起する場合、“有”は一種のモダリティマーカーになると考えられる。

3.2　“VP”が動的な事態

動的事態を表す動詞には、活動動詞（activity）、完結動詞（accomplishment）、達成動詞（achievement）がある[8)]。

3.2.1 “VP”が活動動詞の場合

活動動詞とは，動的な事態を表す動詞である。事態が始まった後、時間の推移によって、動作・行為が展開していく。異なる段階において、動作・行為が違う様相を呈する。まず“有”と活動動詞が共起する例を見よう。

(3) 之後又再辯稱案發前有喝酒，腦袋一片空白。
(その後、事件が起こるまえに酒を飲んだので記憶が飛んだと弁解している。)

(4) 在僑愛社區及仁愛里也有安排眷村老照片、文物及影像展覽。
(僑愛区と仁愛町でも軍人村の古い写真、文物と映像の展覧会が開かれている。)

(3)(4)は“有”が活動動詞と共起することにより現実の時間にある動作・事態が起こっていることを表す。言い換えれば、“有”とかかわる事態は、発話時点より前にすでに起こったことである。発話時点から見れば、完了の意味を帯びていると考えられる。(3)(4)の“有”を完了のアスペクト助詞“了”に置き換えても、文が成立する。“有”は動詞の前に置くのに対し、“了”は動詞の後か文末に置く。しかし、(3)(4)の“有”を取ると、独立した文として成立しなくなる。なぜなら、中国語では活動動詞ははっきりとした終結点がないため、“了”を付け、限界性を作らなければならない。台湾国語では、“有”は似たような働きを持っていると考えられる。

又、(4)のように“有”の後に“安排”のような二音節動詞がつづく言い方は普通話でも見られる。例えば、“有准备”、“有进步”，“有改善”などがある。しかし、普通語ではこのような動詞に対し、いろいろ制限がある。名詞の意味を兼ねている“名動詞”か、「発生・出現」の意味を持つ動詞でなければならないのである[9]。この点に対し、台湾国語の“有 +VP”に現れる二音節動詞は様々あり、このような制限が見られない。

3.2.2 “VP”が完結動詞の場合

完結動詞は動作動詞と同じように、時間の流れにつれて、動作・行為が展開

していく。動作動詞との違いは、完結動詞が動作・行為の終わる終結点をはっきり示すことにある。

(5)　李姓阿嬷說，有看到甘水樹彎下身，涉嫌偷拿走苦瓜。

(李ばあばあは、甘水樹がしゃがんで、ゴーヤを盗んだのを確かに見たと言った)

(6)　他也有聽到歹徒詢問邱國華：「你有沒有喝醉？」

(彼も確かに、犯人が邱国華に「酔っているか？」と尋ねたのを聞いた。)

(5) (6) は普通話と同じように“有”をとり除いても、自然な文である。完結動詞は動作動詞と違って、はっきりとした終結点があるため、“了”を使って、限界性を表す必要がない。しかし、なぜ“有”が使われるのであろうか。筆者は次のように考える。“有”は動詞と共起する場合、現実の時間にある事態が起こっていることを表すため、“有”を使うことにより、(5) は、話し手が“看到”という動作を確かに経験したと、聞き手に強く伝えることができる。(6) は、主語が“聽到”という動作を確実に経験したことを強調して説明することができる。さらに (5) (6) の“有”を取って、文末に“了”を付けると、どうなるであろうか。

(7)　李姓阿嬷說，看到甘水樹彎下身，涉嫌偷拿走苦瓜了。

(8)　他也聽到歹徒詢問邱國華：「你有沒有喝醉？」了

(5) (6) と (7) (8) を比較してみよう。完結動詞の後にくる目的語は、単純な名詞か動詞フレーズではなく、主語と述語がそろっている主述述語文である。一つの事実を述べる場合、時間の展開により、ある人がある動作を経験した通りに述べていくほうが自然であるが、目的語が長い場合、焦点もぼやけてしまいがちである。そのため、動作に焦点をおいて説明する場合、“有”を動詞の前におくことによって、文の焦点が顕著になり、聞き手に伝わりやすくなると考えられる。

3. 2. 3 “VP”が達成動詞の場合

達成動詞は、動作・行為が開始された瞬間に終結するという特徴をもつ。持続を表すアスペクト助詞“着”をつけることができない。

(9)　你有發現酒味嗎？

（あなたはお酒のにおいに気付きましたか？）

(10) 我有到他們家去吃飯。

（私は、彼らの家にご飯を食べに行った。）

(11) 法官查出兩人確有結婚，（後略）。

（裁判官は、二人が確かに結婚していることを調べ上げた。）

以上の3例は“有”を取ると、事態が起こったか、これから起こることなのかなど、時間を表す要素が欠けているため、不自然な文になる。(9)（10）では文末に“了”をつけると、完了の意味が補充され、自然な文になる。(11）は“確実”という副詞と“有”が語彙化して、“確有”になったものである。もともと書面語では“確有其事”、“確有其人”のように“確有＋NP”の用法があるが、台湾国語では、“確有”は名詞だけでなく、動詞と共起し、「確かにそういう事態が起こっている」ことを表す。

3.3　小結

本節では、“有＋VP”を動的な事態と静的な事態に分けて考察した。“有+VP”の用例を分析した結果、“有”は時間性をもたない属性動詞と共起できないことが分かった。状態動詞と共起する場合、動作の性状に対し、強調のニュアンスが読みとれる。“VP”が動的な事態である場合、動詞の性質により、“有”を省略すると、非文になる現象も観察された。“有”が省略できない場合、完了の意味を持ち、文を完結させる働きも持つ。又、“有”が本来不要であるにもかかわらず、“有”が動詞の前に現れた場合、“動詞”に対し、強調の意味を表す。

4. “有 +VP”の“有”について

“有 +VP”の“有”は完了や強調の意味を持つ。元来、中国語ではある事態

が完了したのを表す時、“VP+ 了”という文法形態をとることが多い。本節では“有 +VP”を“VP+ 了”と比較し、動詞と共起する“有”の本質を明らかにしたい。

4.1 “有 +VP”と“VP+ 了”

（12）他回家了。（彼は家に帰った。）

　　他有回家。（彼は家に帰った。）

（12）は単文で見るとき“有”と“了”を置き換えても意味が変わらない。会話文においても同じであろうか。

[外から帰ってきた甲は、李さんを見かけなかったので、乙に対し次のように尋ねる]

(13a) 甲：小李回家了嗎？

(13b) 乙：他回家了。

(13c) 乙：？他有回家。

（13a）は甲が、“VP ＋了”の文法形態をとって、ある事態が起こったかどうかを尋ねる。返事としては、（13b）は乙が“他回家了”と答えたのが自然であるのに対し、（13c）は乙が“有回家”と答えたのは不自然である。単文で見る“有＋ VP”と“VP ＋了”は場面と絡むと、成立できる文と成立できない文が生じる。これは“有”と“了”のもつ性質がこうした違いをもたらしたと思われる。（13a）は、甲が単純にある事態が起こったか、起こらなかったかについて尋ねた場合、（13b）のように“了”を使って、その事態が発生したと答えても、聞き手の聞く意図と矛盾を生じない。（13c）では、“有”を使うことによって“回家”という動作が焦点化され、過去にそういう事態が存在していることを表す。（13a）の現時点においてある事態が起こったかどうかという質問にたいして、矛盾が生じたため、文が不自然になる。しかし、場面が変われば、“有＋ VP”は“VP ＋了”と同じように使われるケースもある。

[警官の甲が、乙に李さんのアリバイについて訊ねる場面]、

(14a) 甲：小李當天有回家嗎？

(14b) 乙：是，他當天回家了。

(14c) 乙：是，他當天有回家。

この場面において、(14a) では警官の甲は“回家”という動作が起ったかどうか、“有 +VP”の形で乙に聞いた。“VP+ 了”で聞くことも可能であるが、“有”を使うことによって、“回家”という動作に焦点を当てることができ、乙に聞きたいポイントをはっきり伝えることができると考えられる。返事の部分に関しては、(14b) では乙は淡々とある事態が発生したことを述べているのに対し、(14c) では乙はある事態が過去に起こったことを確認しながら、答えているというニュアンスが読み取れる。

[甲はドラマに感動して涙をこぼした乙を見て、次のように言った]

(15) 甲：你哭了！

乙：不 , 我沒哭。

甲：有，你有哭。

(15) では、甲は乙が泣いたという新しい発生事態に気づき、“VP+ 了”という形で相手に尋ねた。そうしたら、乙は「いや、泣いていない」と否定した。しかし、甲は確かに乙が涙を流したところを見ていたため、乙の答えに賛同できず、“有”を動詞の前につけて、もう一度乙に起こった事態が真であることを確認したのである。

4.2 “有”は限界点を示せるか

中国語では、ある事態が完了したことを表したい場合、動詞の後に何かをつけるという方法がある。しかし、(16) のように非限界性動作動詞につく場合、結果補語や数量補語を付け加えなければならない。つまり (17) (18) のように、結果補語の“到”や数量補語の“一碗”を付ける。そうすることにより、時間的・量的な限界点が明示され、独立した文として成立する。

(16) ？我吃了飯。

(17) 我吃了一碗飯。(私はご飯を一杯食べた。)

(18) 我吃到下午兩點半。(私は午後二時半まで食べていた。)

もしくは、(19) のように文末に語気助詞“了”をつけることにより、新しい事態の発生を表すことができるので、独立文として成立する。又、(20) のように“有 +VP”の形を取るのも一つの方法である。(20) では“有”は後につづく動詞フレーズ全体を包んで、発話以前にある事態が起こったことを表す。(21) のように、目的語に修飾成分がかかっても、“有”の位置は変わらない。(20) (21) から分かるように、“有”は必ず動詞フレーズの前に来る。目的語の修飾成分の有無により、“了”を付け加えるか、付け加えないかを気にする必要がないため、構文的にはシンプルである。話者は過去にある事態が起こったと発話する際、“VP+ 了”を使うより、“有”の方が便利ではないかと思われる。

(19) 我吃了飯了。(私はご飯を食べた。)

(20) 我有吃飯。(私はご飯を食べた。)

(21) 我有吃一碗飯。(私はご飯を一杯食べた。)

続いて、“有”は“了”のように限界点を示せるかについて考察を進めたい。

(22) 我昨天晚上吃了飯，就睡了。(昨晩私はご飯を食べてすぐ寝た。)

(23) ？我昨天晚上有吃飯，就睡了。

(22) では“吃”という動作に“了”がつくことによって、限界点が示され、動作が完了し、すぐ“就”の導く動作“睡”が実行されたことを表す。しかし、(23) のように“有”で“了”を代用すると、文が不自然になる。なぜなら、“有”は“了”のように限界性を示せないからである。“有”の本質を突き詰めると、“有”はある事態の存在を表すことで、“有”が動作を一区切りとして修飾する。アスペクト助詞のように動作の完了という限界点という性質を持たないと思われる。しかし、(24) のように“有”が“吃飯就睡”という事態を一つの事件として取ると、文が成立する。

(24) 我昨天有吃飯就睡了。(私は昨晩ご飯を食べてすぐ寝たんだよ。)

4.3 “有”が表す強調の意味

1945 年以後台湾に入ってきた中国語は、台湾語との接触によって、台湾語の

もつ完了と強調の意味を融合し、台湾国語にその特徴が現れたと蔡 2003 は指摘している[10]。言い換えると、“有”は完了を表す“了”と焦点を表す“是”の二つの性質をもつ。ゆえに（25）は（26）の意味に近い。

（25）阿Q有去美國。（台湾国語）（蔡 2003 引用）

（26）阿Q是去了美國。（普通話）（蔡 2003 引用）

次の例から“有”と“是”による強調の用法を見てみよう。

(27a) 我每天都有運動，為什麼還是沒長高？

（私は毎日運動をしているんですが、なんで身長が伸びないんですか。）

(27b) 每天是做何種運動？

（毎日どんな運動をしているのですか？）

（27a）は自分が毎日慣習的に運動をしていることを強調して相手に伝えるため、“有”を“運動”という動作の前に付けた。（27b）は相手が習慣的に運動していることを理解している前提の下で、“是”を動詞の前において、その動作の内容を聞き出す。言い換えれば、“有”は過去に起こった事態が真であることを強調するのに対し、“是”は過去に起こった事態の内容について強調の意味を表す。又、（28）のように“有”と“是”が共起する例が見られる。

（28）中、高年級學童問鎮公所暑假是否有辦活動等問題。

（中・高学年の生徒が区役所に夏休みにイベントがあるかどうかなどの質問をした。）

台湾国語では、習慣性の動作を表す時、普通話と同じように動詞に何もつける必要がない。（29）（30）のようである。

（29）我每天聽空中英語教室。（私は毎日英語の番組を聞く。）

（30）我們老闆抽菸。（うちの上司はたばこを吸う。）

しかし、その習慣性の動作に対し、強調の意味を表す時、“有”を動詞の前につける。

（31）我都有吃很多水果，然後也不算晚睡，可是臉色一直很差。

（私はフルーツをたくさん食べることを心がけ、寝るのも遅くないのに、どうして顔色が悪いのですか？）

(32) 房東說：簽約後才知道房客有抽菸，我該怎麼辦？

（大家さんは、「契約した後、賃借人はたばこを吸う習慣があると知りましたが、どうしたらいいですか」と言った。）

(31) では“有”は“吃很多水果”という事態に対し確認の意味を表す。(32) では、“有”は“抽菸”という事態に対し、断定の意味を表す。

5. 今後の課題

以上、台湾国語の“有 +VP”について考察した。台湾ヤフーを通して、新聞、ブログ、読者の投稿、小説などから用例を収集し、調査した結果，“有 +VP”は台湾国語で頻繁に使われており、口語だけではなく、書面語でも使われるようになったと分かった。

“有 +VP”を分析した結果、台湾国語の“有＋ VP”は属性動詞以外の動詞と共起することができること、共起する動詞によって、完了か強調の意味を表すこと、そして動詞に焦点を当てたい場合、“有”を動詞の前につけることができることがわかった。

今後、モダリティの角度から、“有＋ VP”について、“有”の表す強調の意味について研究を続けたい。

注

1) 1945 年、日本が台湾の植民統治を放棄し，台湾が中華民国の統治下にもどったことを指す。
2) 近年台湾意識の高揚により、学校では週に一回郷土言語（閩南語、客家語など）の授業が施行されるようになった。
3) 陳麗君 2011（103 頁）参照。
4) 台湾華語とも言われる。最近外国人向けの教材は“台湾華語”を使うことが多い。
5) 有働彰子 2010（22 頁）参照。
6) 曹逢甫・鄭縈 1995 は、台湾語の“有”には非状態動詞の前に現れ、動作の完成

と存在を表す“存在貌”という用法がある。中国語の“了”が表す完了アスペクトの用法に該当すると指摘している。

7) 劉绮紋 2006 参照。

8) Vendler の定義による。劉绮紋 2006 参照。

9) 朱德熙 1986 と劉月華 2001 参照。

10) 蔡 2003 では、台湾語の“有”は“領属”(所有)、“存在”、“呈現”(出現)、“存在貌”(完成)、“強調”という五つの意味を持っている。一方普通話の“有”は、所有、存在、出現の意味のみを持っており、完成と強調の意味は“有”の否定用法だけに見られる。台湾では、言語の接触により、完成を表す“有”と強調を表す“有”が共に台湾国語の“有”に現れている。

〈参考文献〉

蔡維天 2003〈台湾普通方言中的“有”—谈语法学中的社会因缘与历史意识〉《首届国际语言方言语法学术研讨会论文集》黑龙江人民出版社

曹逢甫・鄭縈 1995〈谈闽南语「有」的五种用法及其间关系〉《中国语文研究》第 11 期

陈平 1988〈论汉语时间系统的三元结构〉《中国语文》第 6 期

鄧守信 1986〈汉语动词的时间结构〉《第一届国际汉语教学讨论会文选》北京语言学院

董秀芳 2004〈现代汉语中的助动词“有没有”〉《汉语教学与研究》第 2 期

刘月华 2001《实用现代汉语语法》商务印书馆

吕叔湘 1942《中国文法要略》商务印书馆。

马建忠 1983《马氏文通》商务印书馆。

石毓智、李讷 2001〈新兴问句“有没有＋ VP”产生的根据〉《汉语语法化的历程》北京大学出版社

王森・王毅・姜丽 2006〈“有没有 / 有 / 没有＋ VP”句〉《中国语文》第 3 期

邢福义 1990〈“有没有 VP”疑问句式〉《华中师范大学学报》第 1 期

鄭良偉 1997《臺華語的時空疑問與否定》遠流出版社

朱德熙 1986〈现代书面语里的虚化动词和动名词〉《第一届国际汉语教学研讨会论文集》北京语言学院出版社

有働彰子 2010「「国語」教科書の中の「台湾国語」―台湾における「国語」規範の歴史」『東アジア研究』東アジア学会

陳麗君 2011「言語接触による言語変化と文法化現象の一例―台湾中国語“有”構文の分析を中心に―」『山形大学大学院文化システム研究科紀要』第 8 号

劉绮紋 2006『中国語のアスペクトとモダリティ』大阪大学出版会

〈引用例出典〉

台湾ヤフーから無作為的に抽出したサンプル

（てい　ぶんき・お茶の水女子大学大学院博士後期課程）